

第二節 近世奈良の閉幕

幕末の思想と学問

尊王攘夷論と
奈良

十八世紀の末期以来、幕藩制の崩壊過程に敏感に反応を示し、何らかの点で新しい思想を展開し、あるいは蘭学を学んで新しい技術や科学的知識を身につけた。なかにはさらに新しい世界観や人間観に到達し、近代的な思考の論理にまで説きおよび人もあった。それらは、ときには封建制の否定に至る思想であり、ときには重商主義的発想であり、また、近代ナショナリズムを連想させるもの、あるいは近代科学史の前史を飾るものさえであった。総じていづれも近代思想の萌芽といえるものであろう。しかし、これらの人々のなかには、幕政批判のたぐいによって弾圧されたものもあって、それらの思想もなお為政者や大衆を動かすまでには至らず、やがてくる明治維新をリードすることはできなかった。それらは孤立した思想、また未熟な学問といわねばならぬものであった。このような事情が、幕末の思想界において、いわゆる尊王攘夷論を表面に押し出させた理由であった。

奈良地方は、商品経済の進んだ農村地帯を擁していたから、たとえ凶作でも東北地方の比ではなく、外圧といっても海岸線がなくて、それが直接でないためにその実感はうすい。江戸や長崎のように情報も早くはなく、長崎との往来がとくに便利なわけではない。大坂のように町人学者を出すほど町人社会の層は厚くはなく、伝統的な寺社

の力もまだ強い。川路聖謨のような世情に明るい奉行を迎えた時期もあったが、城下町ではないから当時の知識層であったはずの武士も少ない。情報は、主として江戸や京都と往来していた奉行所関係者や町民、京都と関係の深い寺社系統の人々、大坂や堺などと通交する町民らを通じてであったであろう。したがって奈良は、近代的思惟の萌芽ともいえるような考えをもつ思想家を生み出すには、その基盤が薄弱であったことは争えない。幕末期の奈良の思想や学問は、それ故にこそ京都と深くかわりつつ尊王攘夷論の系統が主流となったといつてよい。ことに奈良は、建国の聖地と考えられていた大和にあり、かつては王城の地でもあり歴代天皇陵もまた多く、さらに皇居のある京都にも近かった。これらの事情は、やはり大きく奈良の幕末の思想を方向づけるものであった。

尊王攘夷論は、その文字の示すとおり王者をたつとび、外からの敵をうちはらうという思想であつて、本来幕藩制を支えてきた思想である儒教のなかにあつた。それ故、十九世紀に入つて支配層の動揺と社会不安と外国の圧力という危機が来たために、この儒教が尊王攘夷論という形をとつたのであつて、それは名分論を主張する水戸学において典型的にあらわれた。水戸学はここに後期水戸学として急に復興して尊王と攘夷を高唱しつつ実践活動にまで進展した。しかし水戸学一派に限らず、十八世紀末期以来の難局は、広く支配階層である武士に危機意識をもたらし、各藩では多く藩校を開いて儒教を主とする学問にはげむことになった。藩校のなかにはその開校の早い有名なものもあるが、このころからの設置が圧倒的に多いことは、この事情を明らかに物語っているであろう。さきに記した奈良奉行所の明教館もまたその一つであつたのである。

尊王攘夷論には、儒教の系統のものだけではなく、神道や国学の流れのものもあつた。もともと神道は、江戸幕府のもとでは仏教と習合しつつ幕藩権力の統制下にあつた。神道説としては、初期には中世以来仏教と関係深い吉田神道が主流をなしていたが、封建教学として儒教が確立してくるにつれて、神儒習合の神道説が生まれてきた。

林羅山の理当心地神道や、伊勢外宮の神官度わたらひのよよし会延佳によって唱道された度会神道、吉田神道から出た吉川きつかわ惟足とれたるの吉川神道などがそのおもなものであったが、尊王論との関係で、ことに重要なのは山崎闇斎に始まる垂加神道であった。

垂加神道は、天皇崇拜の信仰にもとづいて大義名分と封建道徳を説き、京都とくに公家社会に大きな影響を与えたものであって、この立場は当然幕府政治の批判となるものであり、やがて宝曆事件（二喜）をおこすことになった。この天皇中心の神道説は、そのうちも多かれ少なかれ幕末の尊王家を刺激したものである。

国学では、本居宣長は『古事記』の研究において儒教や仏教による古典解釈をしりぞけ、わが国の古典にみられる真精神を求めて古道を明らかにし、いたずらなあげつらいを人間のさかしらとして排除し、唐心からこころを捨てることを主張した。その結果は神に対する絶対の信仰となるが、宣長はとくに神道説を展開はしなかった。それを受けたのが平田篤胤で、かれの思想を復古神道とよんでいる。その思想は、これまでの神道説を全面的に退け、仏教・儒教・道教・ヨーロッパ思想をも取入れつつ万物の創造から人間の内面的救済にまでおよぶ壮大なものであるが、その特徴はむしろ復古を実現するための理論とその実践性にあった。すなわち天皇の神性にもとづく尊厳さの根柢をわが国の古典に求め、社会をそのような復古的な姿として神国の実を示そうとするものであったから、これが尊王攘夷の論に展開したのはこれまた自然のなりゆきであった。篤胤の没後の弟子は一三三〇人といわれるが、そのなかには神官や下級武士のほか、名主・庄屋階層のものや在郷商人なども含んでいた。庄屋層らが復古神道に引かれたのは、かれらが支配と被支配との接点にあって、社会の矛盾と危機を身をもって感じ、しかも、ほかに思想的伝統をもたなかったからであろう。そしてこの復古神道は、その復古主義と尊王主義とが、天皇の古代的宗教的権威の復活による新政権の実現という王政復古を、イデオロギーとして基礎づける役割りを果たすことになるので

ある。

幕末尊王攘夷の論が高まるなかで、大和を代表する思想家といえは、まず高取藩に仕えた谷三山があげられる。三山は商人の出身で、若いとき聴覚をそこなったため読書に専念して経史に通じ、その家塾興讓館には多くの人を集め、やがて藩士にとり立てられた。その学は詩文を後にして経国済民の学を先にしたといわれ、国事の多難を憂えて尊王攘夷を主唱し、しばしば藩主や京都にあった諸侯に意見を上申し、奈良奉行川路聖謨もその建言を用いたという。また、頼山陽や五條の森田節齋とも交わり、慶応三年（一八六六）六六歳で没した。三山の門下には国学者として知られる高田の岡本通理らがあった。

高取が大和中部の幕末学問の中心とすれば、五條は南大和の中心であった。五條に幕府の代官所が置かれたのは寛政七年（一七九五）であるが、文化二年（一八〇五）には代官所内に主善館という学舎がおかれ、儒者荒井鳴門と横谷葛南がその教授であった。このような文教の地としての伝統が幕末に大儒で尊王家である森田節齋を出した理由であろう。節齋は医師の子で京都・江戸などで学び、頼山陽に師事し勤王の土梅田雲浜らと交わった。吉田松陰・頼三樹三郎らもかつて節齋に従学したといわれ、その門下からはのちに記す天誅組に加わるものもあり、尊王の儒者としてその名が高く、明治元年（一八六八）に五八歳でなくなった。

大和中・南部の尊王の儒者たちの影響はもちろん奈良においてもみられるが、大和北部としては、むしろ国学の系統の強い今村文吾をあげねばならない。文吾は安堵村の人で中宮寺の医官であり、国史を中心としてあわせて医学・儒学を研究して家塾晚翠堂をおこし、熱烈に尊王を説いた。したがって勤王の志士でかれのもとに身をかくすものも多く、天誅組の挙兵にあたってはその門下から参加するものがあり、文吾はひそかに軍資を供給して後援した。彼は天誅組の失敗に胸を痛めつつ文久四年（一八六四）に没している。

これが勤王の運動にも連なるものであった。

すでに早く三代將軍家光のとき、幕府は山陵調査を奈良奉行に命じたことがあったが、これがようやく現実の日程にのぼったのは元禄期であった。『異稱日本傳』の著者として有名な松下見林は、京都の儒医で史家でもあったが、各地の山陵を踏査考証して、元禄九年（二六六）に『前王廟陵記』を著した。彼はこの書のなかに奈良所在の陵墓について記述しているが、ここではなお中世以来の伝承にもとづく考説も多かった。ただ見林はその序文で、中世以来盜賊が陵墓をあばき、あるいは農夫が耕して田園とするのを見て、涙を草葬の袖にうるおすままに、旧記を考え古老に問うてこれを著したと述べているように、この著述は単に古墳の研究にあつたのではなく、皇室尊崇の意図によるものであった。

このような天皇陵墓の荒廃を嘆くという気運のもとで、幕府による元禄の山陵修理が行なわれることとなるが、



御陵 図 絵 「橋本家文書」
(京大図書館蔵)

つぎに、奈良における儒教や国学や神道などの系譜をもつ学者や思想家を生み出す契機となったものとして、陵墓顕彰の事情をかえりみる必要がある。それは、このことが奈良の尊攘論を育てた特別の理由をなしていると思われるからである。

陵墓の調査と 江戸時代は、さきに述べた史料の調査と同様に、陵墓についても研究が

すすめられた時代であった。そしてこの時代を通じて何度かにわたって調査や修理がおこなわれたが、実は

その直接の動機となったのは、松平信之に仕えていた郡山藩の細井知名の進言であった。知名は有名な儒者細井広沢の兄であったから、弟を通しての願いが受け入れられたもので、元禄十年（二六〇）に京都所司代は京都町奉行と大坂城代と奈良奉行妻木頼保・内田守政に命じて天皇陵の調査に着手させ、ついで翌年には修理を終えた。このとき大和二九陵の周垣築造ができたのであって、その結果は「諸陵周垣成就記」にまとめられている。ついで享保十七年（二五三）に再度の修造があつて、陵前に高札が立てられ、陵墓の清掃のことが村方に申し付けられた。その高札の文面の一例はつぎのようである。



鶯 陵 碑

成務天皇高札之写

字石ずか

此陵之地廻り百貳拾壹間半之内、雑人牛馬等猥ニ入問敷候、掃除無^{ゆだん}油断^{ましく}一
可^事申付候、依^事之年貢免許之^事支

子二月

此高札 山陵村預り申候（超昇寺郷）
（諸陵御改帳）

なお享保といえは、若草山頂上の鶯塚の碑も、享保十八年（二五三）に東大寺僧庸訓によつて建てられたもので、表に「鶯陵」とあり、裏に『大和志』の編者並河誠所（永）の誌した文を刻している（〔奈良市史〕、〔考古編〕）。

そのうち安永七年（二七六）に前記の『前王廟陵記』が補正再版されたことは、陵墓への関心の高かったことを示すものであった。そしてこの雰囲気のもとで、文化四年（二八七）には陵墓の調査検分が行なわれ、その結果は「陵所絵図」として京都所司代の手元でまとめられた。超昇寺郷の「諸陵御改帳」はそのときの記録の写しと思われるもので、その文

面はつぎのとおりであり、これまでの経緯をよくあらわしている。まず図面があつてつぎに請書がある。

右絵図面之通

神功帝陵七ヶ村立会山之頂ニ、御敷地回り五拾九間超昇寺村ノ式丁程北之方ニ当リ在来候処、享保年中御改之上、御敷地回り間敷通竹垣被仰付、御高札御渡被成下候処、其後御高札等朽損御困ひ等も無之、等閑ニ相成在之候処、此度御改之上、御高札御書替御渡、右御敷地間敷通り竹垣又者生垣ニ而も都合宜方ニ御囲ひ垣等村方ノ取建、永久亡失不仕様取斗^(計)鹿^(粗末)抹無之様仕、御高札朽損其外品替之儀者、早速御当地御役所様江御断可申上旨被仰渡奉畏候、依之御請書奉差上候処如件

和州添下郡超昇寺郷

七ヶ村惣代

文化四年卯四月

山陵村

庄屋 喜兵衛

常福寺村

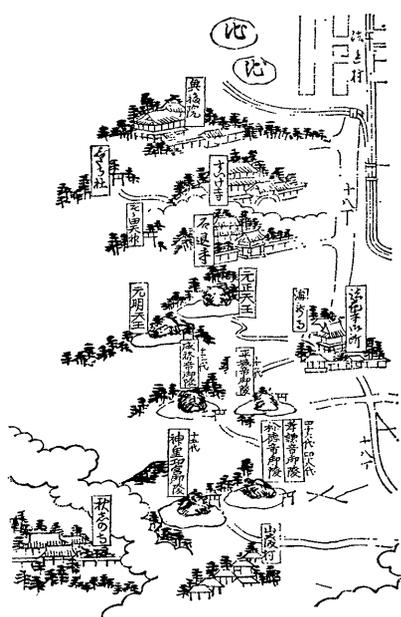
年寄 宇兵衛

著名な蒲生君平の『山陵志』が成つたのは、この調査の翌文化五年（一八〇）であつた。そのうち海防の問題も生じてくると、自然国家意識も高まり、皇陵のことはさらに世人の注意をひくこととなつた。

以上のように陵墓の調査と修築は、江戸時代を通じて断続的に行なわれてはいたが、なお、いずれも不徹底であつたことは事実である。ところが、天保期を迎え尊王運動がおこつてきた段階で、陵墓問題はまた大きく浮かびあがつてきた。水戸藩主徳川斉昭が家臣桑原信敬を大和に遣わして陵墓を踏査させたのも、奈良奉行川路聖謨が在任中大和の諸陵を巡拝し、その修理の必要を幕府に進言したのも、このような氣運のなかにおいてであつた。そこで、嘉永四年（一八五）になつて、幕府は奈良奉行佐々木信濃守顕発に対して大和陵墓の取締まりを命じ、安政元年

(二六三)には、奈良・京都・大坂・堺の各奉行にそれぞれ管内陵墓を監督させる方針を定めた。そして翌年大和では、ときの奈良奉行戸田能登守氏著は、与力中条良藏・羽田半之丞らにいつけて、古市の学者北浦定政や桜井の絵師岡本桃里らの援助のもとに大和諸陵の詳細な調査をおこなわせたのであった。その報告書はその翌年京都所司代に提出されたが、このときにはすぐには修理に着手されることもなかった。

有名な文久の調査修理は、こういう下地のうえのことではあるが、直接には宇都宮藩主戸田忠恕の建白によるものであった。しかし、藩主幼少のため家老戸田忠至が山陵奉行となつて上洛し、北浦定政・岡本桃里・谷森善臣らが諸陵調方を囑託され、全面的な調査がすすめられた。奈良奉行所でも与力中条良藏が同心佐々倉権左衛門・鳥山藤左衛門らとともにこれに助力した。いま奈良市域所在の諸陵墓は、文久三年(二六三)の秋から翌年にかけて修築さ



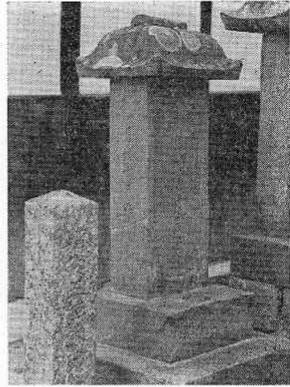
元治元年「和州奈良之絵図」の一部

れ、その報告の勅使は開化・聖武両陵を巡拜した。そしてこの修理のとき、これまであいまいであった諸陵の治定が全面的になされている。すなわち、これまで不明となつていたり疑問のあつた奈良市域所在の陵墓でこのとき治定されたものは、神功皇后陵・安康天皇陵・平城天皇陵などであり、またこれまで元明・元正両天皇陵とされていた宇和奈辺古墳・小奈辺古墳にかえていまの両天皇陵としたのも、このときから慶応初年においてであった。また、ながく平城天皇陵とされていた古墳にはこのとき石灯籠

が立てられたが、明治になってこれは仁徳天皇皇后磐之媛陵いわのひめと定められ、垂仁天皇皇后日葉酸媛命陵ひばすもこのころまでは神功皇后陵とされていた。そのほか開化・垂仁・成務・聖武・光仁の諸天皇並びに春日宮の諸陵もすべてこのとき修補が加えられている。

文久度修補または治定に係る陵墓

元明天皇奈保山東陵	奈良阪町	文久三年治定
元正天皇奈保山西陵	慶応元年治定	
聖武天皇佐保山南陵	法蓮町	文久三年修理
聖武天皇皇后佐保山東陵	法蓮町	翌年竣工
宇和奈辺陵墓参考地	法華寺町	明治十八年指定
小奈辺陵墓参考地	法華寺町	明治十八年指定
磐之媛命平城坂上陵	佐紀町	文久四年石灯籠をたてる
平城天皇楊梅陵	佐紀町	文久三年治定
日葉酸媛命狭木之寺間陵	山陵町	文久四年石灯籠をたてる
成務天皇狭城盾列池後陵	山陵町	文久三年修理
称徳天皇高野陵	山陵町	翌年竣工
神功皇后狭城盾列池上陵	山陵町	文久三年治定
開化天皇春日率川坂上陵	油阪町	文久三年修理
垂仁天皇菅原伏見東陵	尼辻町	文久三年修理
安康天皇菅原伏見西陵	宝来町	文久三年治定
光仁天皇田原東陵	日笠町	元治元年修理
<small>(崩基親王、光仁天皇の父)</small>		
春日宮天皇田原西陵	矢田原町	元治元年修理
<small>(早良親王)</small>		
崇道天皇八嶋陵	八島町	元治元年修理



中条良蔵墓

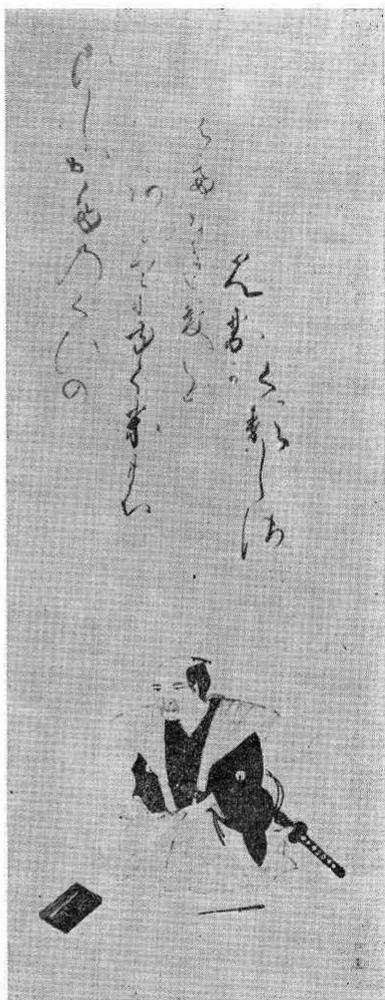
た。その業績のうちでとくに有名なのは、正しいとして、ここに神武陵が決定したのであった。良蔵は晩年種々の恩典を受け、明治元年（一八七〇）に六九歳で没した。また「大和山陵図」を描いた岡本桃里は、八木の呉服商の家に生まれ、のち桜井に住んだ人で、絵は四条派の流れをうけ、勤王の精神の深かった画家として知られている。

北浦定政と 平城宮跡
陵墓の修築に協力しその研究につとめた北浦定政は、また平城京保存や条里制の研究にも大きな足跡を残したのである。定政は文化十四年（一八七五）に古市に生まれ、藤堂藩の古市奉行所に仕

え、のち藩士に列した人で、和歌や絵画をよくし、近江の富田泰州・播磨の中村良臣・津藩の斎藤拙堂らに儒学を、本居内遠に国学を学んだ。本居宣長の『国号考』にも考証を加えたほどの国学者であり、尊王の志も厚かったから、陵墓の荒廢を嘆きその修理に努力したのであって、勤務の余暇を利用して自ら工夫した測量車で実測したり、古書や口碑を尋ねるなどして研究を重ね、蒲生君平の『山陵志』に考定を加え、嘉永元年（一八二〇）には「打墨繩」一卷を著している。

このようにして文久の陵墓の修理は慶応元年（一八六五）までに全部終わり、この事業に協力した郡山・高取・柳本の諸藩主や藩士たち、また奈良奉行所与力中条良蔵や北浦定政らは、多年この調査修理に功があったとして厚く褒賞されたのであった。中条良蔵は奈良で生まれて与力となり、謹厳・公正な良吏として知られ、幕府の命によって陵墓の調査に従事した。良蔵は奈良奉行の戸田能登守氏著の後援と羽田半之丞・鳥山藤左衛門・佐々倉権左衛門の助力のもとに、寝食を忘れて調査につとめ

定政はさらにその測量術を用い、文献・伝承・地名などから平城京と条里制を研究して、嘉永五年には「平城京大内裏跡坪割之図」と「大和国班田略図」の第一稿を著した。前者は平城左右京をそれぞれ九条四坊とし、北端中央部方八町分を宮域にとり、さらにその北辺に二町分の北辺坊を置いている。また現地に遺存する道路や河川などの記入はもちろん、地図の四周には「西大寺園目錄」などによる史料の提示と考証がある。この条坊の研究は、その正確さと現在亡失している地名の記入されていることなどによって、平城京跡研究の礎石を築いたものとして高く評価されている。後者は平城京条坊と奈良盆地条里を図面にしたものである。その後定政はさらに「大和国坪割細見図」を著したが、これは京南条里に関するもので、集落・池・川・道路などが記入され、京南東条里は三五条まで、京南西条里は四三条までが描かれている。このような平城京ならびに大和の条里制の研究は、明治時代に関野貞によって指摘された平城外京にふれていない点などの欠点をもつものの、当時としては、まさに画期的な正確



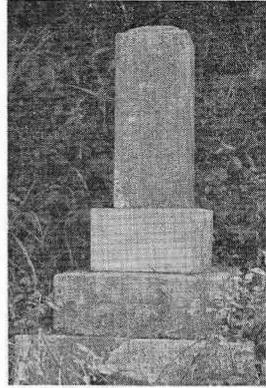
北浦定政肖像

岡本桃里画、定政辞世の和歌で

「こしかたの くひのあまりに ゆくすえの
はてなき夢を 見るがくるしさ」

字は円照寺門跡伏見宮文秀女王の筆になる

(北浦直人氏蔵)



北浦定政碑（日笠町）

さをもつ調査であった。

定政は、安政度ならびに文久度の陵墓調査や平城京研究などの業績によって、度々の褒詞や白銀などを下賜され、御陵御用掛りをつとめ、慶応二年（一八六六）には光仁天皇陵・春日宮天皇陵・崇道天皇陵の陵長を命じられ、さらに大和・山城領地古市出張所出納監司兼郷里巡察を申しつけられた。この間、伴林光平ら勤王の士との交わりも深い中に、明治四年（一八七二）五五歳で没した。近世奈良の生んだ学者として忘れられない

人である。

定政は前記著作のほかに、内裏坪割図や班田図など多数の図や図解の冊子を残している。昭和五十一年（一九七六）十一月六日が定政生誕一六〇年にあたったので、古市念仏寺の墓所と日笠町の定政碑を整備し、新しく顕彰碑をたてた。また奈良国立文化財研究所ではその資料を調査し、平城宮跡資料館では記念展を行なった。

参考文献

喜田貞吉「平城京の研究者北浦定政」（『歴史地理』二二ノ四）明治四一年

奈良国立文化財研究所『平城宮跡保存の先覚者たち——北浦定政を中心として——』昭和五十一年

北浦直人『北浦家 わが先祖』昭和五十一年

木村芳一『奈良県史 条里制』昭和六二年

伴林光平と
奈良の人々

今村文吾と親交のあったのが伴林光平である。光平は河内の尊光寺に生まれた浄土真宗の僧であったが、国学者伴信友の教えを受けて古典の研究と和歌に長じ、大和に出て斑鳩に住み中宮寺の御内人となった。このころからかれの門を訪れて教えを受けるものも多くなり、文吾をはじめ勤王の志士らとも交

わりを深くし、国事を談じ尊王を唱え、山陵の調査にも努力した。この山陵調査については、文久三年（一八五三）二月に朝廷からつぎの御沙汰書を受けている。

中宮寺宮内 伴 林 六 郎

山陵荒廢之儀、年来恐懼憂傷苦心探索之趣達ニ天聽ニ勸感候、尚又出精可レ致ニ勸勤ニ御沙汰候事

（『殉難録稿』）

天誅組の挙がおこると、五條に行つて一行に加わつてその記録方となり、参謀方をも兼ねてこの一党と苦難をもにしたが、こと敗れて北倭の田原村（いまの生駒市）で奉行所の同心らに捕えられ、奈良の獄舎に投じられた。光平の天誅組の記録である『南山踏雲録』は、獄中にあつてこの挙の全容を記したものととして貴重な文献であるとともに、彼の心情をよく示すものである。光平が捕えられたとき、奈良奉行所から差し出された天誅組一件書類のなかにつきのように記されている。

記 録 方

伴 林 六 郎

此伴林六郎ハ光平ト申ス歌人ニテ、月二度宛奈良奉行所へ罷越、古事記杯ノ講釈致シ、与力同心ニモ弟子ニ相成候者モ有之候、騒動ノ前途出入致居候

光平はのちまもなく京都に送られて元治元年（一八六〇）二月獄中で斬られた。ときに五二歳であつた。彼は多数の和歌を残しているが、そのうちのちに愛国百人一首のなかに入れられたものをあげておく。

君が代は巖と共にうごかねば

くだけてかへれ沖つ白波

かれはまた戯作をもよくし「櫛の落葉物語」を著している。

さらに天誅組の事件以前に学問作歌の奈良社中の人々の師匠として、幕末奈良の学問文化に大きな影響を与えた。

すなわち安政五年（一八五三）、光平は春日若宮祭を見てその祭礼記を残したが、そのはじめに「月毎の廿日の日に南都にものでして、佐保殿しろしめす君の御前に御歌字びのこと仕へまつり初めしは、きのふけふのやうにとそ思へりしか、指をり数ふれば今は七年はかりに成にけり」とある。光平は、まだ河内にいたころ嘉永四年（一八三二）にはじめて奈良にきて以来、門人の公宿業松宮宇右衛門清門の鍋屋町の別宅を定宿として、神風館という扁額をかかげ、毎月歌道指南と『古事記』の講釈のために奈良にきていたのである。そして光平門下の奈良社中にはつぎの人々があつた。

その中心になつたのは、奈良奉行所の与力であつた橋本喜久右衛門政孝である。政孝は詩歌・北宗画にすぐれ能楽をよくした多才の勤王家であつて、光平が奈良の獄にとらえられていた間は筆紙をおくり何かと世話をしたので、光平にとっては獄中もむしろ快適であつたといわれる。明治になつてから政孝は奈良県少属に任じられ、さらに手向山八幡宮の祠官となつている。その長男橋本平三政和も与力を勤めたが、やはり光平の弟子であり、与力橋本文右衛門政済や同心西山信次郎義礼も社中に名をつらねている。

つぎに興福院門跡徳苗・眉間寺主寛海・華嚴院主文英をはじめ、一乗院宮の侍医で法蓮に住んだ三好信叟省や山村御殿円照寺の家臣仙石字兵衛義和、春日社家で高畑にいた富田大和守光美、漢国神社社司の宮司靱負宗則など寺社関係の人々がある。また般若寺町の布晒屋古川徳太郎政信、鍋屋町の松宮宇右衛門清門、北魚屋町の米商人で獄中の光平に差入れをしていた柳生莊三等啓、樽井町の伝馬職取締役であつた滝野吉兵衛逸雄な



荒川重郷墓（瑞景寺）

ど町人出身と思われる人たちも社中にあった。そのほかにも花芝町の新兵衛春潤、雲井坂の井上内匠富道の名がみえる。

その他門人に金沢治助利恭とあるのは、のち昇平と改名した人物で、明治時代になってさきに記したように『平城坊目考』^(明治二)を出版し、『平城坊目遺考』^(明治二)を著した人である。山田杜園扶疏とは、さきに詳述した一刀彫の森川杜園であって、山田というのは光明院町の狂言師山田八郎右衛門重高の二世となったからである。さらに南都隠士として神洞子重敬というのは絵師冷泉^{たみづか}為恭の奈良隠棲中の変名であるという。為恭は、画家狩野永岳の甥で冷泉と称し、菅原を姓とした。古を思い勤王の志をもっていたが、京都所司代酒井邸に出入したため佐幕派と疑われ、尊攘派からつけねらわれたので、京都を脱出して紀伊・和泉・大和を転々として逃れた。この間、南都に一時身をかくしていたものである。しかしついに浪士におびき出されて山の辺の道で暗殺された。為恭は、形式をふむ土佐派を退けて正統な大和絵の復興をめざす復古大和絵派の一人として知られている。

伴林光平門下の奈良社中にその名を連ねた人ではないが、光平と交わりのあった人に書家でもた歌人として知られた荒川重郷があった。光平は重郷からその書齋の家号をたのまれて^は埴舎と名付けているが、その記のなかで「尾張国人荒川主年頃都ノ蟬小川辺ニスミテ広ク千鳥ノ跡ヲ尋ネ、朝夕硯ノ池ニオリ立テ、或ハ漢ナル倭ナル、或ハ上世ナル中世ナル、悉ニ其趣ヲ学ヒ得テ、ソコヲノ風流男ヲ教ヘ導キタルカ、近頃彼墨モテ記シ、筆ノ跡ヲモテ改メテ紵シケン埴田ノ里ニシモ移リ住ヌトカ」云々と重郷のことを述べている。重郷は雲華と号し、名古屋藩士荒川新兵衛の子で美濃国の出身である。はじめ江戸

に遊んで旗本に仕え、のち京都鴨川のあたりに閑居して書道や和歌を教授した。上代風の能書家であり、河本延之について和歌を学び、また国学にも通じていた。万延元年（一八六〇）六三歳のとき奈良にきて坊屋敷町に住み、大原重徳に仕え、元明天皇陵の守衛長となり、春日社歌会の主任にもなっている。明治二年（一八六九）に七二歳で没した。法蓮の瑞景寺にその門人で光平社中の人でもあった柳生等啓らによつて建てられた「雲華荒川先生之墓」がある。その銘文に「当時国詞書法益行、都下之人士執^レ費^レ踵^レ門者不^レ違^レ教矣」とある。重郷の作としてつぎの歌が伝えられている。

つくろはぬ松もて暮きしみあらかは

神代のままを示すなるらむ

光平をめぐつて奈良にはこのような寺社関係の人や町民や奉行所関係の者、さらには学者文化人ともいえる人たちがあつて、古典に親しみ和歌をたしなんでいたが、この間に尊王の秀困気もりあがっていたと思われる。幕末奈良の文化の一面を物語るものである。

大政奉還

天誅組の余波

江戸幕府が開国にふみ切つたその処置と、將軍継嗣についての方針とに対し、これを幕府の専権として非難した公家・大名・志士らは、安政六年（一八五九）一斉に嚴罰に処せられ^{（安政の）}、これに対し、その翌万延元年には大老井伊直弼が暗殺されるといふ事態^{（榎田門外の變）}が相ついでおこつた。開国とそれにつづくこれらの事件を契機として、国内政局は急に緊迫してきたのである。こうして京都を中心に尊王攘夷の論が激化し、

ついに文久三年（一八六三）には、將軍徳川家茂は上洛して同年五月十日を攘夷の期日とすることを布告しなければならなくなった。そのうえその期日がくると、長州藩は早速下関で外国船に砲撃を加えて攘夷を実行するとともに、朝廷に対して攘夷の親征を奏請した。そこで朝議もこれに決して、同年八月十三日に詔が出されたのである。それには「為今度攘夷御祈願大和行幸、神武帝山陵・春日社等御拜、暫御逗留、御親征軍議被_レ為_レ在、其上神宮行幸事」とあって、奈良滞在とそののちの伊勢行幸のことがきめられた。このとき、孝明天皇の親征に先立って、大和で幕府打倒の旗をあげたのが天誅組であった。

天誅組は元侍従中山忠光を盟主とし、元土佐藩士吉村寅太郎・元刈谷藩士松本謙三郎（奎堂）・備前の藤本津之助（鉄石）ら尊攘急進派の浪士たちで組織された。かれらは攘夷親征のことがきまると、その翌日早くも京都を脱出して河内を経て大和に向かい、討幕の兵をあげて天皇を大和に迎えようとしたもので、大和はここに尊攘運動の渦の中心になろうとしたのである。八月十七日、一行はただちに宇智郡五條の幕府代官所を襲い、代官鈴木源内らを斬り、近くの桜井寺を本陣として代官所を焼き払った。ここに五條代官所がまず襲われたのは、これが幕府直属の役所であり、これを収めることによって南大和を手中にし、十津川の郷士とも連絡をとろうとしたものであろうし、また五條が森田節斎らを出して、尊王の学問の中心でもあったからであらう。一行はここで挙兵の趣旨を宣言して同志を募り、伴林光平らもこれに応じて馳せ参じたのであった。

ところが翌十八日、京都では朝議にわかに一変して尊攘急進派は失脚し、天皇の大和行幸も中止となったため、天誅組は極めて困難な立場に立たされることになった。一同はそれでもなお討幕の軍を進めることとし、本陣を吉野郡天川辻に移し十津川郷士を集めて五條に再び出陣したが、すでに幕府からは郡山・高取・津の諸藩にその討伐の命令が下されていたため、急に高取城を襲撃することになった。しかし、この戦いに天誅組は敗れて天川に退いた

が、さらに諸藩兵に包囲され、そのうえ十津川郷士が朝命によって脱退したためついに大打撃を受けた。そこでその一部は東吉野の鷲家口および鷲家に突破口を求めたが、それも失敗して結局多くは討死し、または捕えられ、ここに天誅組は拳兵後約一か月半で潰滅したのである。この天誅組の蜂起は、奈良が直接その舞台にはならなかったものの、その拳兵の与えた影響は大きかった。

尊攘運動は、八月十八日の政変と、それにつづく天誅組や但馬生野の乱・天狗党の蜂起の失敗によって大打撃を受け、ここに急進派にかわって公武合体派が力を得てくることになった。公武合体の動きは、すでに早く幕末危機の中にもばえて尊攘運動のなかで進行し、朝幕の合体と諸藩連合政権をめざして進められていたものであった。ところが尊攘急進派を中心とする討幕運動の激化のなかで公武合体派は一時力を失ったが、いまや再び幕府を中心としてもりかえしてきた。急進派によって藩論が固められた長州藩は、この退勢を回復しようとして元治元年（二八益）京都に入り、ここに蛤御門の変（禁門の変）がおこり、ついで幕府の第一回長州征伐が決行された。

しかし、一方では薩英戦争や四国連合艦隊の下関砲撃事件があり、この間に薩長連合が進められ、事態は再び急転回しようとしていた。いまや外国軍事力の強大さをみせつけられては、単なる攘夷論は時局打開のスローガンとはならなくなり、諸藩の利害関係は入り乱れて、儒教流の尊攘論をふりかざしての公武合体や列藩連合の構想などは、この難局解決の道でないことがようやく認識されはじめたのである。こういう空気のなかで慶応二年（二八六〇）におこされた幕府の第二次長州征伐は、いたずらに物価の騰貴と民衆の動揺をよぶ結果となり、幕府軍にとって戦況不利のうちに將軍家茂が大坂城で病死したため、征長軍は失敗のうちに引き上げなければならなかった。いまや時局は幕府の無力を目の前にして急速に討幕に傾いていった。

ええじゃないか

このような政局のめまぐるしい変転と社会生活の不安のなかで、突然「ええじゃないか」の運動がおこったのである。

慶応三年（一八五七）の夏ごろから、名古屋のあたりに伊勢大神宮の神符などが降ったとのうわさがきっかけて、人々の間に奇妙な「ええじゃないか」の乱舞がおこった。やがてそれは京阪地方を中心に近畿・東海・中国・四国などの各地に広まった。

大和では、慶応三年の九月から十月のはじめにかけて奈良の町にお札の降下があり、やがて各地にひろがっていた。奈良の町では同三年には「卯九月下旬頃より伊勢^{（大）}大神宮御被所々江御降被遊、市中不^レ残踊歩行、賑敷事言葉ニ難^レ尽^{（餅飯殿町諸記）}」と記しているし、「太神宮様天下り給ふ御身絵^{（天和高田市、村島正一氏蔵）}」には「当卯年八月遠州尾州より天随り初り、当国ハ九月南都初メ」とあり、ともに奈良町への神符類の降下を九月としている。しかし「繁栄記録帳^{（宮武テラス氏旧蔵）}」によると「南都ハ十月朔日ニ奈良坂江初太神宮御札御下り初り、夫より追々御下り、尤も諸神諸仏御下り辰正月三日四日迄踊大はやり」とある。また漢国神社の神官大神宗則によって書かれた「慶応三歳寧楽神靈天降記^{（池田末剛氏蔵）}」によれば、「山城の南なみよりして此寧楽の里に初て天降らししは、神な月^{（十月）}の初四日の日にも有ける」とあり、十月のはじめに奈良坂村の某家に降下したとしたためている。

降下の神符は、伊勢の内宮外宮に限らず「太神宮其外色々之神仏者申ニ不^レ及、恵須須^{（美）}大黒天尊像、或者一分銀一朱銀丁銀……^{（餅飯殿町諸記録）}」とあり、餅飯殿町ではさらに、春日大明神や水室社のお札・大日如来像などの降下があったことを伝えており、その旨を奈良奉行所に届けている。また「奈良ニテハ米涌出ル也^{（法然寺過去帳）}」と伝えられ、阿波の国では娘や小判まで降ったとさえいわれた。

神仏のお札などが降った家では奇瑞と喜び、これをまつって供物を捧げ、美しく着飾るやら仮装するやらで近隣

の人々や通行人まで加えて宴を開き、「ええじゃないか、よいじゃないか……」と唱えて踊りまわったという。大
安寺村のようすをみても「おかげおどり始り申候、当村男女残らずおどり申候」(『万葉集』)と書きとめている。また、
山城国相楽郡の村びとは、奈良の古市あたりまでおどりに出かけてきたともいう。

それは「ええじゃないか」といわれたように何をしてもいいわけで、仮装から裸体に近いものまであり、歌も面
白おかしく卑わいな文句がまざり、鳴物も雑多で、ときには土足で他人の家に入り、もらっても取ってもこわして
もええじゃないかという調子であったという。

この民衆のさわぎは、東は江戸から西は中国・四国の東部までもまきこんだものであったが、一般には「おかげ
まいり」の系統のものであったといわれる。しかし文政年間の「おかげまいり」からは六〇年はたっていないので
おかげ年ではなく、お札ふりといってもいたるところに各種のものが降っており、さらに集団伊勢参宮をとまなわ
なかつたものであるから、種々の点でおかげまいりとは非常な相違がある。たしかにお札が降ったのを導火線とし
ている点は同様であり、文政のおかげおどりとも無縁ではなく、その点ではおかげまいりの変形したものともいえ
よう。しかもこのようなお札の降り方からみて、反幕府側の者によって人心を扇動し騒乱状態をおこさせるための
作為であったとする説が以前からいわれている。それにしても、その計略が図にあたったというか、爆発的な乱舞
となったところに、当時の民衆のなかに潜在していた封建制末期の息苦しさ、生活の困難さと異常な政局の動揺
によるいらいらした心理とがうかがわれる。

この「ええじゃないか」運動について、従来から歴史的に色々の評価がなされてきた。あるいはこれを封建末期
の民衆の退廃現象とみなし、あるいは百姓一揆などにみられる民衆のエネルギーをそらせ、または歪曲させるための
政治的役割を果たしたものと、またほかに、この騒動の根源として上からの改革に追いつけない民衆の弱さのあ

らわれをみてとる説もある。また、踊りの言葉のなかに「よなおりはええじゃないか」とあることや、その前年から「御蔭直しくどき節」が流行したことから、この騒動のなかに民衆の政治改革への気持ちをくみとる考え方もある。いずれもある程度首肯できるが、結果からみて明治維新がこの民衆のエネルギーを結集し得なかったとするならば、民衆はやはり胸苦しさや不安と焦燥とから一時的にも逃避し解放されたいという気持ちと、何らか明るいときがきそうだという期待感とがまざりあった、宗教的大衆行動であったといえるであろう。そしてその期待どおりであったか否かはともかくとして、まもなく大政奉還を迎えることになる。

近世奈良の閉幕

「ええじゃないか」の騒ぎの年、慶応三年（一八五七）十月十四日、將軍徳川慶喜は京都二条城から大政奉還を奏請し、ついで十二月九日には朝廷から王政復古の大号令が発せられた。この政局激変のなかで、京都はことに世情も騒然としてきたため、大和の十津川郷士や高取藩兵は他の勤王諸藩兵とともに京都御所の警備についていた。興福寺の僧侶も、十二月二十七日には朝廷に対して玄米一〇〇〇石を献上し、天恩に報ずるため一山相應の御用があれば申し付けられたい旨を申し出ている。なおこの玄米の代金三〇〇〇両は翌年正月末日まで全部を上納した。

そのうち京都の情勢がいよいよ不穏になってきたため、慶喜は一たん二条城から大坂城に退いたが、翌慶応四年正月三日になってついに鳥羽伏見の戦いが勃発した。それは会津・桑名両藩を中心とし、幕府の大政奉還ならびにそののちの將軍慶喜に対する処置に不満をもつ者たちが、大坂から京都に向かって兵を進めたために、京都にあった薩摩・長州両藩との間で衝突がおこったものである。郡山・高取などの諸藩兵はこのとき京都守衛の任にあたっていた。そこで朝廷を擁する薩摩・長州の藩兵は幕府側の軍を迎え討ち、これを破って大坂に進撃したので、慶喜は会津らの諸藩兵とともに大坂から海路江戸に逃れて謹慎した。この戦いで敗れた幕府側の武士たちのなかには奈良

置されて参与久我通久がその任に当たり、熊本藩兵と十津川郷兵がこれに従属した。ついで二月一日この鎮台は廃止となり、新たに大和国鎮撫総督として久我通久が任命され、大和の政治・警察・軍事を管轄することになった。通久は同七日奈良に来て興福寺内の摩尼珠院に入り、興福寺が仮に管理していた奉行所の事務を収め、興福寺から予備米一〇〇〇石を徴した。またこのとき小俣前奉行も新政府に異心のない旨の誓紙を出した。ここに奈良奉行所は開設以来二五〇有余年でついに閉ざされたわけで、江戸幕府の奈良支配は終止符をうったのである。